
勘違い馬鹿だけど名探偵

AKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勘違い馬鹿だけど名探偵

【Nコード】

N7907K

【作者名】

AKA

【あらすじ】

名探偵のいるところ、事件が起き、人が死に、不可解な現象が起こる。得をするのは探偵だけ。警察の不満は頂点に達し、名探偵の抹消を謀る。鬼川探偵は逃げ延びることができるのか？下ネタが入っています（そこまでひどくはないけど）。そういうのが苦手の人には読まない方がいいです。

序章

名探偵。

事件が起こる場所に颯爽と現れ、事件を解決する。
行く先々で事件が起こる。

というか、名探偵がいるからややこしい事件が起こる。
わざわざする必要のない密室殺人を起こす犯人。

わざわざ暗号でメッセージを残す被害者。

意味もなく封鎖される屋敷。

なぜか童謡の通りに事件を起こす犯人。

いちどあげだしたらきりがない。

警察の怒りは頂点に達した。

……自分たちの仕事を増やされ、そして手柄を全て奪っていく名探偵。

……名探偵さえいなければ……

……警察は一つの結論に至った。

……名探偵を消そうと。

名探偵の章

俺は手をゆつくりとあげ、一人の男を指さした。

「蟹原鶴蔵さん、あなたが犯人だ!!」

まわりが驚く。優越感に浸る。

この感覚が忘れられないから探偵はやめられないんだよな……。

「なぜ私が犯人だと……?」

むっ、邪魔しやがって。

少しいらつとしながらも答えるとする。

指を立て、ゆつくりと歩く。

おきまりの歩き方だ。

「アリバイ、ですよ」

もったいぶって言う。

(説明略)

「さすがね。名探偵さん」

「そんなことはないですよ。はっはっはっはっは」

ラフな服装の名探偵、鬼川ショウジ。

俺に話しかけてくるのは助手のナルミ。

幼なじみでお節介なナルミは、俺一人じゃ事件が解けないと言い

張り、鬼川探偵事務所兼鬼川宅に居候している。

いなくても事件は解決するのだが。

「なんか言った?」

こめかみに青筋を浮かべたナルミを確認した直後、俺の体は宙を舞い地面にたたきつけられた。

しまった。口に出たようだった。

「いたいな、ナルミ」

「あんたが悪いんでしょ」

だからこいつは苦手なんだよな。

「聞こえてますけど」

ナルミは言うが早い。俺の手に手錠を掛けた。まさか……。
しばしの沈黙。

……

「ナルミ……。おまえそんな趣味があったん」「黙らないと殺す！」
……はい」

言葉の途中でヒップドロップが炸裂。お花畑が見えました。

「ああ。おじいちゃんが手を振ってるよ……ナルミ」

「まだ生きてるだろうが、ためえのじじいはよ。もう一発くらいいたい
か？」

あの痛みは尋常じゃない。その場できちんと正座する。

「あの、ナルミ様。ご質問させていただいてよろしいでしょうか」
「許す……」

「今あなたはどこに向かわれていらっしゃるのでございましょう
か」

ナルミは正座したままの俺を引きずってどこかに向かっている。

「ふっ」

「……」

俺の悲劇の始まりだった。

警察の章

引きずられること30分。大きな建物が見えてきた。どこの町に出もあるような警察署だ。

「ナルミ、ストップ。さっきズボンが脱げたんだ」

今はパンツも脱げそうだった。

「ふっ」

「パンツも脱げそうなんだけど」

「ふっ」

分からないという人のために、今の状況を説明しよう。

Tシャツとパンツでスネが血だらけな俺は手錠を掛けられ、正座したまま引つ張られている。鬼に。悪魔に。大魔神に。

「なあ、何で警察署なんか行くんだ」

「……」

俺が警察行く用事なんかあったかな……。

「もしかしてあれか。事件解決したから表彰されるとかそういう系か」

「うっ、うん」

何だそうなのか。そうならそうと言ってくればいいのに。

……この格好でいいのか。血だらけパンツTシャツでいいのか。

……血だらけパンツTシャツだと血だらけのパンツがプリントされてるTシャツみたいだな。じゃあなんだ。一言でまとめると……変態？

「着替えたいんだけど」

「私のハイソックスはく？」

「履かないけどもらっとく……やめろ、はやまるな。」

ナルミの手にはどこから持ってきたのか金槌が。

なんやかんやで警察署の入り口に付く頃にはぼろぞうきんになっていた。

ナルミは俺を入りに正座させたまま受付へと向かっていった。俺を助けてくれる優しい人はいないのか。

「あの……大丈夫ですか？」

背後からまるで天使のような言葉が。こんな優しい人はだれだろう。身をよじって後ろを向くと。

鼻息の荒いおじさん。

……見なかったことにしよう。

うおっ。なんだ俺の背中に何か……。変なものが……。やばいやばいやばいやばい！俺の第六感が、というより五感を含めた全てが警報を鳴らしている。

「ナルミ助けてくれよお!!」

俺の叫びに驚いたのか、おじさんはどこかに行ったようだった。

「そういうのじゃないのかよお」とか言っ

しばらくして俺の前にごつい男がやってきた。

「鬼川シヨウジ君だね？」

「……はい」

「名探偵の、鬼川君だね？」

「はい！」

二つ目は即答。

「間違いないね」

「はい」

男は俺の返事を聞くと、俺を抱えて別室へと通した。

ソファの上に投げ出される。これってまさか……。さっきのおじさんと同じパターン？

「あの……」

「何だね」

男は扉の前に立ったままこちらに目を向ける。

「俺……」

「何も心配することはない。こっちで全てやる。」

「それはどういう意味だ？」

この男も危ない。俺の全てが警報を鳴らしている。

「俺……！そういう趣味ないんです！」

「……え？」

「……どうせあれなんだろう。名探偵だからって。」

「……よく分かったね。」

男はズボンのポケットから何かを取り出そうとしている。引つかかってとれないようだ。

あいつ……ズボンの上からごそごそと……？！

「おまえ何してるんだ！こんなところでそんなことしなくてもいいだろうが！」

「これは上からの命令だね。」

「上からの命令でそんなことするのか？人間として恥ずかしくないのか？」

「ごそごそしながら男は言う。」

「おまえをやらないと俺の気がすまないんだ！」

そういつて男は近づいてきた。

やばい……！やられる！

せめてナルミと……。

危機一髪の章

俺は今人生最大の危機を迎えようとしている。

いやだ！俺は男には興味がない！

「君にはすまないと思っている……」

男はそういうと俺の首を絞めてきた。

「い、いきなり、そういう系かよ……」

俺は男には興味がないので必死で抵抗する。そのおかげか男に少し隙ができ男の腕から逃れられた。しかし男の方が扉に近いので、逃げ出すことができない。

説得するしかないか……。

「おい、何でおまえは道を踏み外してしまったんだ。もつと別の道があつただろうが！」

男の表情に変化が見られた。

「そんなこと言つたつて……。小さい頃からの夢だつたんだよ！」
何？！小さい頃からだと？これはまずい。

「だからって俺は関係ないだろ？何で俺を選んだんだよ！」

「しかたないことなんだ。俺が担当だからだ」

担当なんてあるのか！なんかよく分からなくなってきたぞ。

「ほかにもいっぱいいるだろうが！」

「わかつてる。ほかの奴らのリストもある」

リストまで作つてんのか！

「どうしてもつて言うんならこつちにも考えがある」

「力づくか？」

「それはおまえだろう」

「たしかにな。でも許してくれ。そうしないと俺の家族も危ないんだ」

「家族まで巻き込むとはなんて酷い奴らだ。」

家族がいるくせに男に手を出してんじやねえよホモ！！

「そうさ、ひどいやつらさ。しかしおまえも一緒だ。俺たちから奪っていったんだからな。（給料を）」

まさか「心を。」とか言うんじゃないだろうなこいつは。

男は再びポケットに手をつ込んだ。そして黒光りするものを取り出した。

……あれは……まさかおれを責めるための？

危機一髪の章（後書き）

自分が嫌になってくる。

反撃の章

男が取り出した黒光りするもの。拳銃。

「え？」

「ん？」

「え？ちよつ、ええ？」

「はい？」

「ああ、はいはいはいはい。そういうことか」

「どうやらこいつはこういうプレイが好きらしい。」

「勘弁してくれよ。俺そーいうの得意じゃないんだ」

俺の言葉に男は反応する。

「おまえは苦手かもしれないが、俺は得意だ。（拳銃が）」

何言っちゃってるんだこいつ。早くどうにかしないと。

そのとき、扉の方で大きな物音がした。男の意識がそちらに向いたのを見逃さなかった。

扉に向かって駆け出す――

銃声とともに俺の足下に風穴があいた。

まさか本物を使ってまで？

「外してしまっただか」

男は拳銃を俺に向けたまま近づいてくる。

「悪いな。でもこうすれば俺は幸せになれるんだ」

なんなんだその気味の悪い台詞は？

男が引き金を引こうとしたその瞬間。俺は火事場の馬鹿力だろうか、とてつもないスピードで男の懷に潜り込んだ。間髪入れずに拳銃を叩き落としてみぞおちに一発。

バランスの崩れた男から離れ、拳銃に飛びつく。

「形勢逆転だな」

俺の言葉に男は口元をゆがめる。

「拳銃一丁だと思ったのか？もう一丁あるんだぜ？」

この下ネタやろうが。どうせズボンを脱いで「マグナム！」とかやるんだろ。

「わるいな。お前につきあってる暇はない」

俺はその言葉と同時に引き金を引いた。男がマグナムを取り出す前にだ。

俺の撃った弾丸は男の足を撃ち抜いた。

男は声を上げずに床に崩れ落ちた。

史上最高の勘違い名探偵は拳銃を部屋の隅に放り投げると部屋を後にした。

反撃の章（後書き）

なんだこの話。

逃走の章

部屋を出てロビーに戻ると、受付が俺の顔を見て顔を青くしていた。

「まだ逝ってなかったのかよ。あいつは何でやらなかったんだ」

受付の独り言が聞こえる。俺が必死で抵抗してたからだよ。って、お前もあいつの趣味を知っていたのか。

「仕方ねえ俺がやっちゃうか……」

こいつもか！

独り言が聞こえているとは思ってもいないのだろう、受付は俺に声を掛けた。

「名探偵の鬼川さんですよ？ちよつと来てもらえませんか？」

俺は……逃げた。そりやそうだ。

入り口を全速力で通り抜けてふと思った。これはナルミが仕掛けたことなのか。ナルミはあいつらの趣味を知っていてあえて手錠を掛けたのか？

なぜだ？金か？

手錠のせいで走りづらい。後ろからサイレンの音が聞こえてきたので、ひとまず近くのデパートにもぐり込んだ。

パンツとシャツ、手錠という格好の俺は嫌でも目立つ。

ひとまず服屋によった。

俺が着替え終え、工具店の電動ノコで手錠の鎖を切断していたころ、店内放送が流れる。

「迷子のお知らせをいたします。鬼川シヨウジ君、17歳が迷子になっております。Ｔシャツにパンツ、手錠を掛けていて、身長は165センチ、かわいい系の顔をしているお兄ちゃんです。お見かけになったかたは、迷子センターまでご連絡ください」

……俺の人生おわったかも。

てかこんなところで迷子になるか？……警察は俺の居場所が分かっているようだ。ひとまずこのデパートからこっそり出ないとな。

俺はデパートの通路を歩く。歩き出して約30秒。

「あれじゃない？迷子の子」

「ほんとだかわいいー」

「写真の通りだね」

写真？顔を真っ赤にしながらも、冷静さは失っていない。気がつくと、デパートの至る所に俺の写真が。

鬼川シヨウジ

身長165センチで写真のような顔をしています。

重要参考人なので見つけた方は御一報ください。

好奇心旺盛です。

なんじゃこりゃ。

なんじゃ好奇心旺盛ですって。

俺、この町で生きていけるのかな？

……むりだな。

脱出の章

ひとまずこの悪魔の城から出て、別の町で暮らそう。
この町で生きていく自信は俺にはない。

俺は駆けだした。
ここから一刻も早く出たいという気持ちが先走って。
あの扉をくぐれば、新しい未来が待っている。

俺はなんかかつこつけながら走っていた。
何でだろう。なんで人ってこういうとき無意味にこういうこと考
えたりするんだろう。

……俺だけかな？

俺がデパートを出ようと入り靴に向かって走っていると。
向かっている扉の方で何やらざわめきが。
まさか、先回り？

そう思っていると入り口に警官隊が。
俺は方向を変え、エスカレーターで上へ向かう。
どうせどの入り口もふさいであるんだ。

普段から犯人逮捕に役立てばと、体を鍛えている俺は、あつとい
う間に屋上に着いた。

屋上に来てしまった。逃げ場がないのに。
焦って辺りを見回すと、鍵がささりっぱなしの車が。
「そうか。ここは屋上にも駐車場があるのか」

何を独り言言ってるんだ俺は。
考えている暇はない。俺はその車に飛びのると、エンジンをかけた。

なぜか名探偵というのはほとんどの乗り物を乗りこなせる。

「無免許って言うのは分かってるけど、男は勘弁してくれよ」
勘違いを乗せた車は駐車場を後にした。警官隊をはねとばして。

ちなみに車の持ち主は若いカップル。初デートでドライブ、遠くまで来たのはいいが、車を何者かに盗まれて、結局わかれたとかわかれなかったとか。

「くそ、検問かよ」

警察の行動は早かった。そこまでして俺を……。

俺は検問手前のコンビニに車を止めると歩いて、検問突破を試みた。

警察は俺が車で来ると思いこんでいる。それを逆手にとって……。

俺は見つかった。あっさりと。

脱出の章（後書き）

よくわかんない。

闘争の章

「まて！止まれ！」

その台詞で止まった奴を見たことはない。

「何で俺を狙うんだ！そこまでして捕まえたいのか？」

「当たり前だ！お前を捕まえれば俺たちは幸せになれるんだ！」「くそー。なんて変態なんだ。」

「俺の事情は考えないのか！」

「お前はさんざん言い思いをしてるんだろ？！」

「そんな！思いを！したことは！ない！いつも経済難だったし！」「言いながら回し蹴り。」

受け止められる。

「こつちだつて経済難なんだ！」

警官の反撃。

だから男に手を出すのか……。

「なんだあの兵器は？！あんなものまで作ったのか！」

俺は警官の背後を指さす。

もちろん嘘だ。

「え？」

「かかったな！」

俺が警官を気絶させ顔を上げると。

「なんだあの兵器は？」

バズーカのような兵器。

嫌な予感がするー！

俺は駆けだした。

ここから一刻も早く出たいという気持ちとともに。
ここを乗り越えれば、明るい未来が待っていると。

なんだ？聞いたことある？

そんなこと知るか。

駆け出した俺の背後で発砲音が。

走りながら空を見上げるとそこには蜘蛛の巣のごとき網が舞っていた。

「やばい。俺の直感は良く当たる！」

ショウジ、捕獲成功！

俺は捕まった。

捕獲された。

どうしよう。

このままじゃ俺のお尻がっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7907k/>

勘違い馬鹿だけど名探偵

2011年7月27日03時25分発行